

各関係機関の長 殿

鹿児島県病虫害防除所長

令和6年度病虫害発生予察情報について

このことについて、発生予報第1号（4月）を発表したので送付します。

鹿児島県病虫害防除所

〒899-3401

南さつま市金峰町大野 2200

TEL 099-245-1081 (代表)

099-245-1157 (直通)

099-245-1149 (FAX)

テレホンサービス

鹿児島 099-296-6430

296-6431

ホームページアドレス：<https://www.pref.kagoshima.jp/ag13/kiad/boujoshou/index.html>

(3月から新しいアドレスになりました)

メールアドレス：nousou-boujo@pref.kagoshima.lg.jp



農薬の安全使用に努めましょう

農薬安全使用五つの柱

1. 使用する人の安全 使用者自身の健康管理, 安全使用
2. 作物に対する安全 適期, 適正防除で薬害防止
3. 農産物に対する安全 消費者へ安全な農産物を供給
(農薬安全使用基準の遵守)
4. 環境に対する安全 周辺環境への影響防止
(周辺住民等への危被害防止)
(河川, 湖沼, 海などへの汚染防止)
(養蚕, 養蜂などへの危被害防止)
5. 保管管理の安全 保管管理の徹底で事故防止

農薬ラベルを確認しましょう

農薬の飛散(ドリフト)にも注意しましょう

令和6年度 病虫害発生予報 第1号

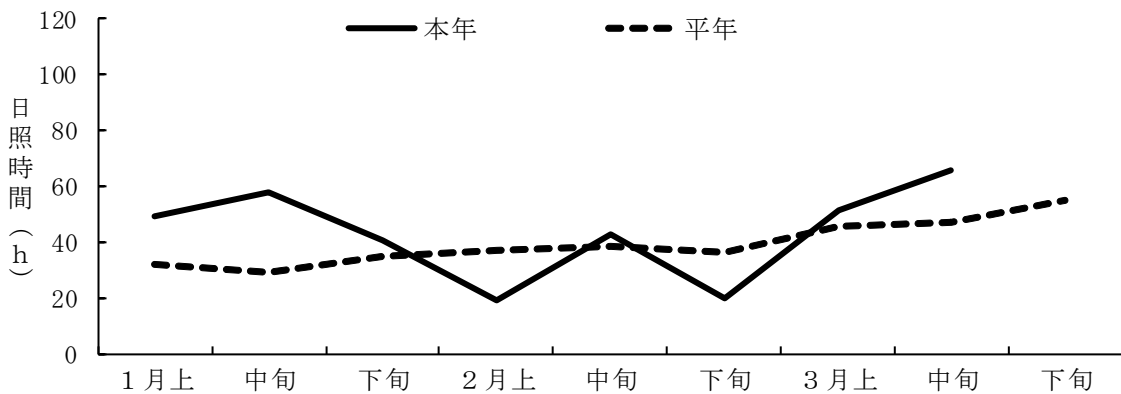
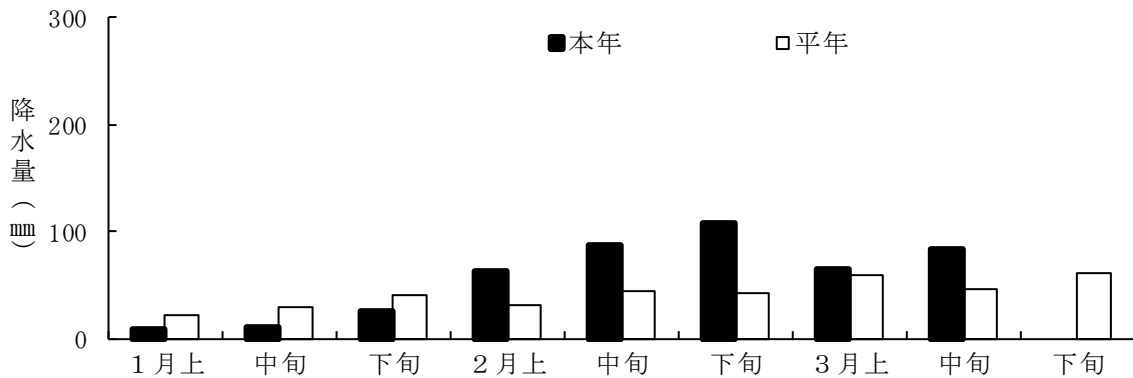
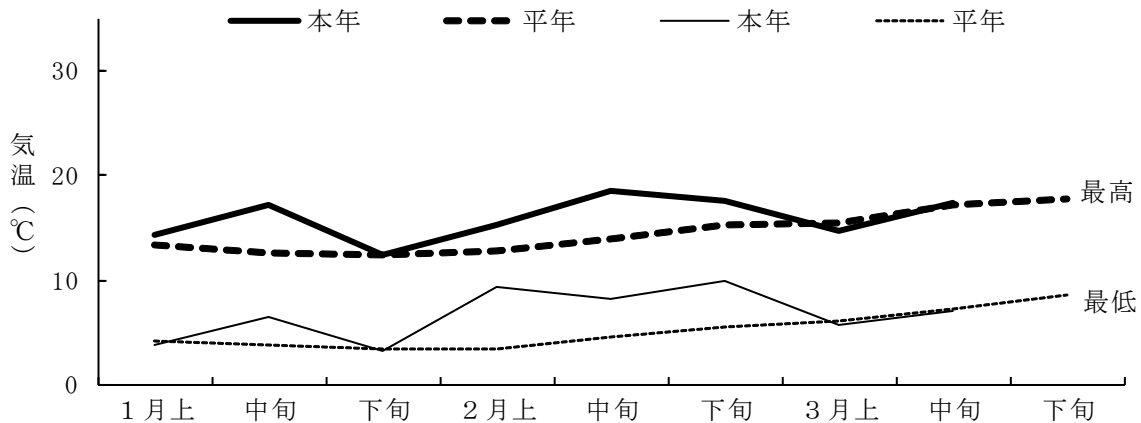
令和6年3月28日
鹿児島県病虫害防除所

【気象概況】

I. 向こう1か月の予報（3月23日から4月22日） 令和6年3月21日 鹿児島地方气象台 発表

要素	地域	確率（％）			概要
		低い(少ない)	平年並	高い(多い)	
気温	九州南部	10	20	70	九州南部では、気温は高く、降水量は多く、日照時間は少ない。奄美地方では、気温は高く、降水量、日照時間はほぼ平年並み。
	奄美地方	10	20	70	
降水量	九州南部	10	30	60	
	奄美地方	30	40	30	
日照時間	九州南部	50	30	20	
	奄美地方	30	40	30	

II. 1～3月の気象情報（鹿児島地方气象台 観測点：加世田）



【病害虫発生予報の概要】

作物		病害虫名等	発生量	
			現況	予報
野菜	キュウリ	べと病	少	やや少
		退緑黄化病	並	やや多
	トマト	灰色かび病	やや多	やや多
		うどんこ病	並	並
		コナジラミ類	やや少	並
	ピーマン	斑点病	並	やや多
		うどんこ病	やや多	やや多
		アザミウマ類	やや多	多
	イチゴ	うどんこ病	やや多	やや多
		アザミウマ類	並	やや多
		ハダニ類	並	やや多
	キャベツ	菌核病	並	並
	エンドウ類	うどんこ病	並	並
		ハモグリバエ類	やや多	多
		アザミウマ類	やや少	並
バレイショ	疫 病（県本土）	やや少	並	
	〃（熊毛地域）	並	やや多	
花き	キク	ハダニ類（県本土，施設）	並	やや多
		アザミウマ類（県本土，施設）	並	やや多
果樹	カンキツ	そうか病（県本土・熊毛地域）	やや少	並
		〃（奄美地域）	並	並
		かいよう病（県本土・熊毛地域）	並	やや多
		〃（奄美地域）	やや多	やや多
		ミカンハダニ（県本土・熊毛地域）	並	やや多
〃（奄美地域）	やや少	やや少		
茶樹	チャ	チャノコカクモンハマキ	やや少	並
		チャハマキ	多	多
		カンザワハダニ	やや少	並

【病害虫発生予報】

I. 普通作物

防除に関する今月の留意事項

1. サツマイモ

(1) サツマイモ基腐病

今作の発病リスクを軽減するために、以下の防除対策を徹底する。

<育苗床>

ア 育苗床では、萌芽の確認や育苗管理及び採苗作業で繰り返し出入りするなど、再汚染のリスクが極めて高いため、育苗床専用の長靴や手袋などを使用する。

イ 萌芽した芽に変色やしおれ症状が見られた場合は、直ちに種いもごと抜き取り、ほ場外に持ち出して適切に処分する。また、萌芽せずに腐敗した種いもも掘り取り、同様に処分する。抜き取り後は、速やかに銅剤を散布する。

<採苗>

ア 基腐病等の感染を抑えるため、地際部から5cm(2~3節)以上の高さの位置で採苗する。

イ 採苗するハサミの刃先は、こまめにバーナー等であぶって殺菌・消毒する。

ウ 苗消毒は、採苗後速やかに行う。薬液は、日光や汚れなどで消毒効果が減少するため、使用日ごとに毎回調整する。

<ほ場>

ア 排水不良なほ場では、植付前に耕盤破砕や明きよの設置を行い、ほ場外への排水を促す。

イ 排水路側の枕畝は表面排水を妨げるため、作らない。枕畝を作った場合は、その途中に排水溝を設置する。また、ほ場外の排水路は、つまりがないか確認する。

ウ 発病株は見つけ次第除去して、その周辺株には銅剤を散布する。なお、除去あとに補植しても再発する可能性が高いため、補植は避ける。

エ 苗消毒による感染防止効果が低下する定植3~4週目頃に、予防・殺菌効果のある剤を散布する。

サツマイモ基腐病の生態と防除に関する詳しい情報は、鹿児島県 (https://www.pref.kagoshima.jp/ag06/documents/documents/74570_20221018104909-1.pdf, https://www.pref.kagoshima.jp/ag06/documents/documents/74570_20221226173000-1.pdf), 農研機構 (https://www.naro.go.jp/publicity_report/publication/files/stem_blight_and_storage_tuber_rot_of_sweetpotator04.pdf) をご覧ください。



鹿児島県
サツマイモ基腐病防除
対策マニュアル(第3版)
令和4年10月改訂



鹿児島県
さつまいも育苗の
ポイント
(令和4年12月)



農研機構
サツマイモ基腐病の
発生生態と防除対策
(令和4年度版)

II. 野 菜

1. キュウリ

(1) ベと病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

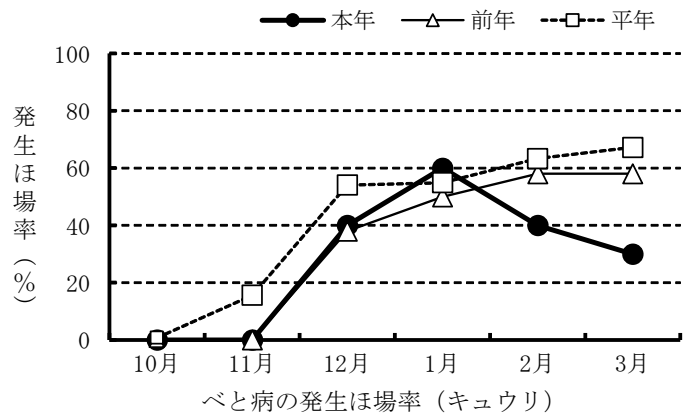
- (ア) 調査結果 発生量：少
発生ほ場率30%（平年67%）
：低い（-）

(イ) 気象予報

降水量：多い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 多湿条件下で発生しやすいので、ハウスの通風換気に努める。
- (イ) 発病葉は早めに除去し、ハウス外に持ち出して処分する。
- (ウ) 肥料切れや草勢の衰えは発生を助長するので、適正な肥培管理に努める。
- (エ) 多発すると防除が困難になるので、早めに防除する。
- (オ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤（RACコード参照）のローテーション散布に努める。



(2) 退緑黄化病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

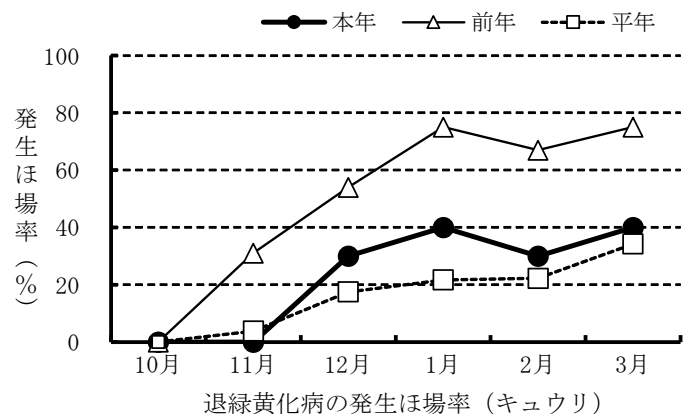
- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率40%（平年37%）：並
コナジラミ類の発生ほ場率
70%（平年53%）：やや高い（+）

(イ) 気象予報

気温：高い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 発病株を認めたら速やかに除去し、施設から持ち出して処分する。
- (イ) 退緑黄化病の病原ウイルス（CCYV）はタバココナジラミが媒介するので、ハウス内に黄色粘着トラップを設置し、発生状況を把握して適期防除に努める。
- (ウ) カブリダニ類などの天敵を放飼しているほ場では、天敵に影響の少ない薬剤を選択する。
- (エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤（RACコード参照）のローテーション散布に努める。
- (オ) 媒介虫がハウス外へ飛び出さないよう、栽培終了まで防除する。また、栽培終了後は抜根し、植物が枯死するまで蒸し込む。



2. トマト

(1) 灰色かび病

ア 予報内容

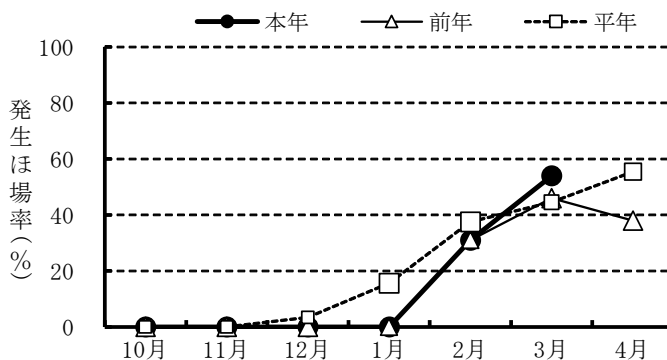
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや多
発生ほ場率54%（平年45%）：並
発生程度の高いほ場を認めた（+）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) ハウスの通風換気を十分に行ない、過湿にならないよう努める。
- (イ) 果実部やへたの付近に付着する花卉は本病の発生源となるので、こまめに除去する。
- (ウ) 発病葉や発病果実は早めに除去し、施設から持ち出して処分する。
- (エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤（RACコード参照）のローテーション散布を行う。



灰色かび病の発生ほ場率 (トマト)

(2) うどんこ病

ア 予報内容

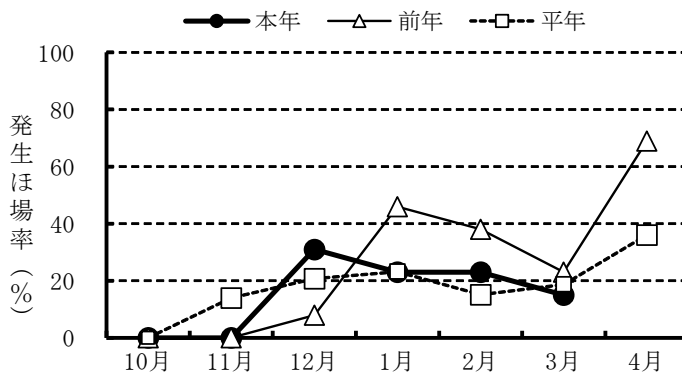
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 並

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率15%（平年19%）：並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 成り疲れなど草勢が低下すると発生しやすいので、適正な肥培管理に努める。
- (イ) 発病葉は早めに除去し、施設から持ち出して処分する。
- (ウ) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤（RACコード参照）のローテーション散布を行う。



うどんこ病の発生ほ場率 (トマト)

(3) コナジラミ類

ア 予報内容

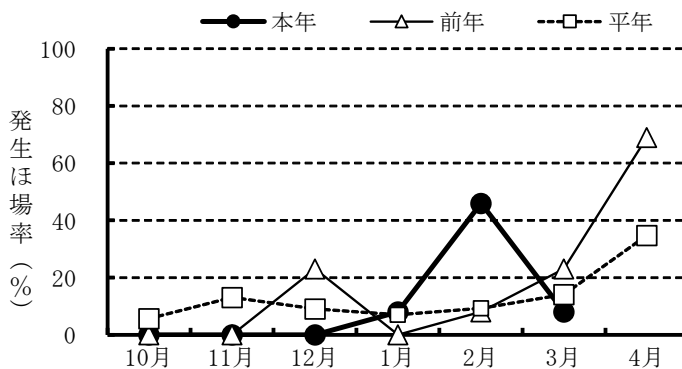
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 並

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや少
発生ほ場率8%（平年15%）
：やや低い（-）

(イ) 気象予報

気温：高い（+）



コナジラミ類の発生ほ場率 (トマト)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) トマト黄化葉巻病の病原ウイルス (TYLCV) を媒介する。黄色粘着トラップを設置し、発生状況を把握して適期防除に努める。

(イ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤 (RACコード参照) のローテーション散布に努める。

3. ピーマン

(1) 斑点病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率67% (平年69%)：並

(イ) 気象予報

降水量：多い (+)

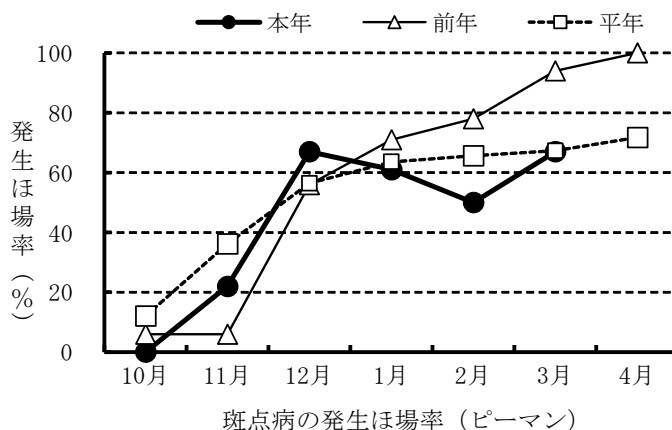
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 多湿条件下で発生しやすいので、ハウス内の通風換気に努める。

(イ) 発病葉はできるだけ持ち出して処分し、菌密度の低下を図る。

(ウ) 成り疲れなど草勢が低下すると発生しやすいので、適正な肥培管理に努める。

(エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤 (RACコード参照) のローテーション散布に努める。



(2) うどんこ病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや多
発生ほ場率56% (平年47%)
：やや高い (+)

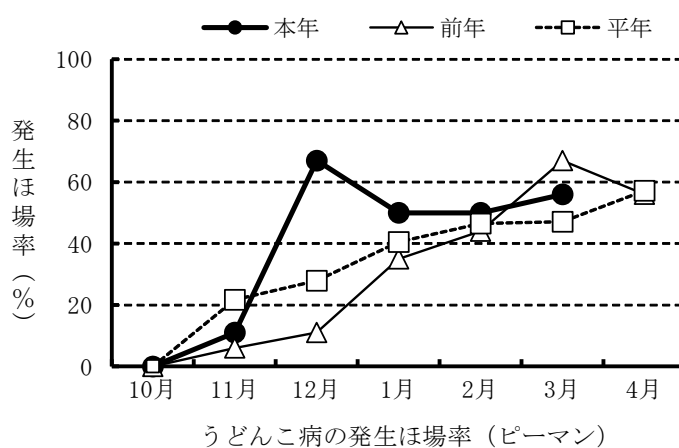
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 成り疲れなど草勢が低下すると発生しやすいので、適正な肥培管理に努める。

(イ) 発病葉は早めに除去し、施設から持ち出して処分する。

(ウ) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。

(エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤 (RACコード参照) のローテーション散布を行う。



(3) アザミウマ類

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 多

イ 予報の根拠

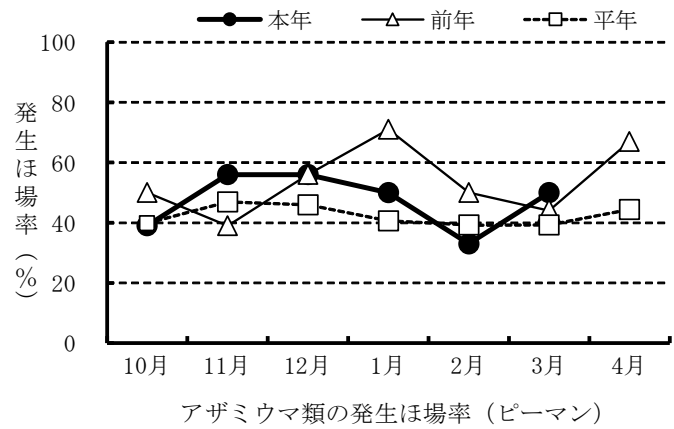
- (ア) 調査結果 発生量：やや多
発生ほ場率50%（平年39%）：並
発生程度の高いほ場を認めた（+）

(イ) 気象予報

気温：高い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) ハウス開口部等に粘着トラップを設置し、発生状況を把握して適期防除に努める。
- (イ) カブリダニ類などの天敵を放飼しているほ場では、天敵に影響の少ない薬剤を選択する。
また、多発したほ場ではリセットを考慮した防除を行う。
- (ウ) 花や新芽の中など薬剤のかかりにくい場所に生息するので、薬剤散布は丁寧に行う。
- (エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤（RACコード参照）のローテーション散布に努める。



4. イチゴ

(1) うどんこ病

ア 予報内容

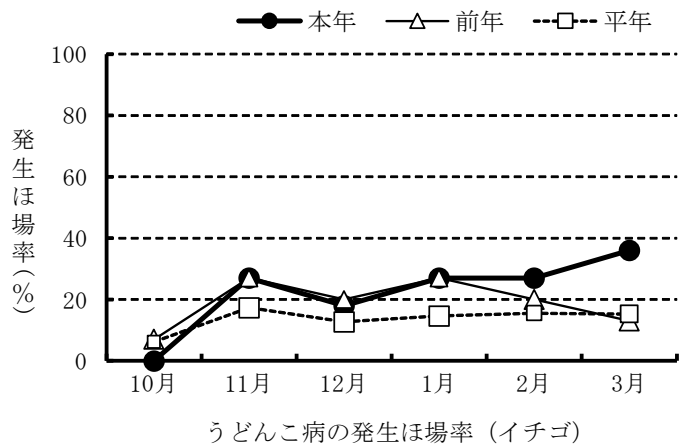
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや多
発生ほ場率36%（平年17%）
：多（+）
発生程度は低い（-）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 成り疲れなど草勢が低下すると発生しやすいので、適正な肥培管理に努める。
- (イ) 発病葉は早めに除去し、施設から持ち出して処分する。
- (ウ) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤（RACコード参照）のローテーション散布を行う。



(2) アザミウマ類

ア 予報内容

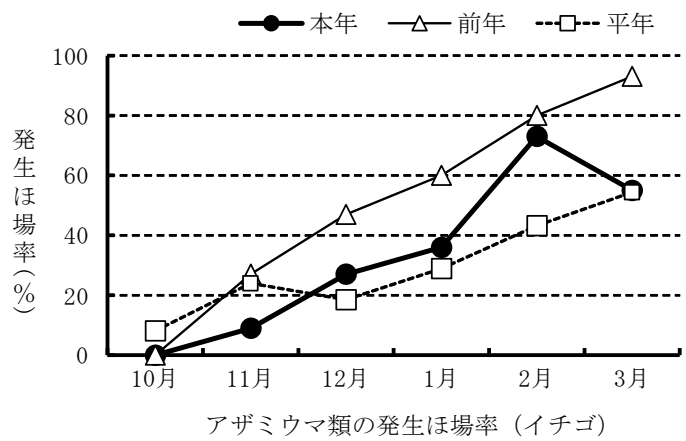
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率55%（平年54%）：並
- (イ) 気象予報
気温：高い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) ハウス開口部等に粘着トラップを設置し、発生状況を把握して適期防除に努める。
- (イ) 花や新芽の中など薬剤のかかりにくい場所に生息するので、薬剤散布は丁寧に行う。
- (ウ) 天敵やミツバチを利用しているほ場では、影響の少ない薬剤を選択する。また、多発したほ場ではリセットを考慮した防除を行う。
- (エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤（RACコード参照）のローテーション散布に努める。



(3) ハダニ類 (令和5年度技術情報第14号 (11月8日付け) 参照)

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

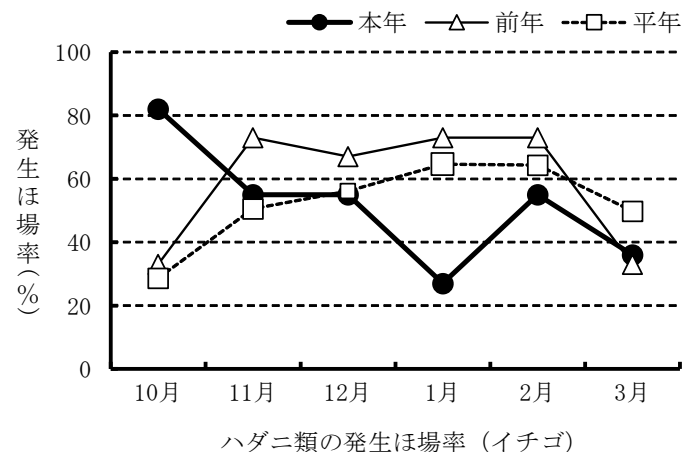
- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率36%（平年50%）
：やや低い（-）
発生程度の高いほ場を認めた（+）

(イ) 気象予報

気温：高い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) カブリダニ類などの天敵を放飼しているほ場では、天敵に影響の少ない薬剤を選択する。
- (イ) 薬剤の防除効果を高めるため、下葉かきを行ってから葉裏にかかるよう散布する。
- (ウ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤（RACコード参照）のローテーション散布に努める。
- (エ) 薬剤によっては、感受性が低下しているの、散布後は防除効果を確認する。



5. キャベツ

(1) 菌核病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率22%（平年26%）：並

ウ 防除上注意すべき事項

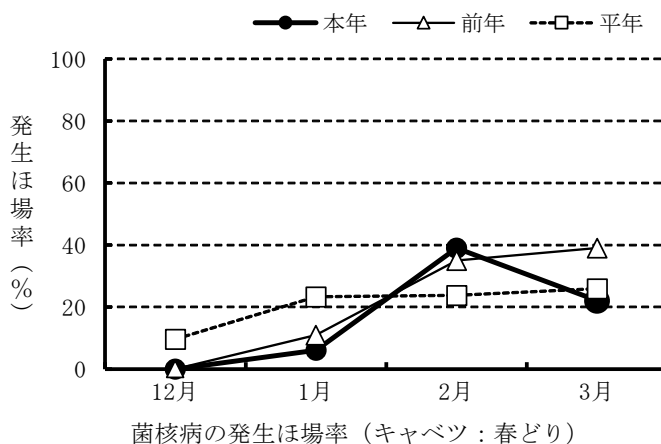
(ア) 結球後は浸透移行性のある効果的な薬剤を散布する。

(イ) 病原菌は地際部から感染しやすいので、薬剤は株元へ十分かかるように散布する。

(ウ) ほ場の見回りをを行い、早期発見に努める。

(エ) 発病株は周辺株や次作の伝染源となる。発生が認められたら菌核を生じないうちにほ場外に持ち出し処分する。

(オ) 適期収穫を行い、収穫終了後の残渣は適正に処分する。特に発病残渣をほ場に残さない。



6. エンドウ類

(1) うどんこ病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率25%（平年25%）：並

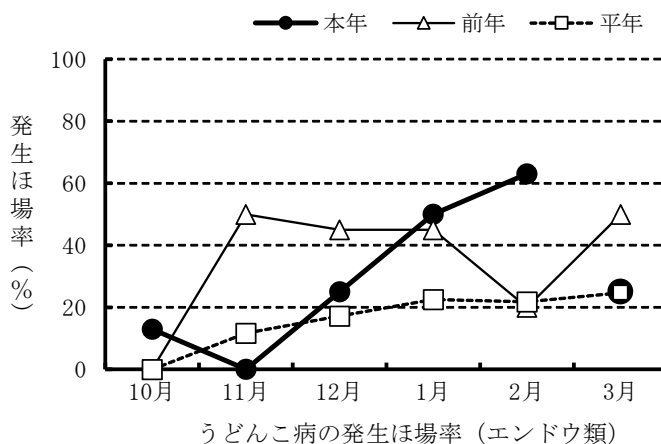
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) かん水不足や着莢負担等による草勢低下で発生しやすいため、適正な管理に努める。

(イ) 多発するとごま症の発生につながるため、ほ場の見回りをを行い、発生を認めたら下位葉の葉裏まで薬剤が十分かかるように散布する。

(ウ) 既に発生しているほ場では5～7日おきに連続散布し、徹底した防除を行う。

(エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤（RACコード参照）とのローテーション散布を行う。



※令和5年10月～令和6年2月は山川、垂水、阿久根を調査。

令和6年3月は阿久根を調査（他地点は収穫済み）。

(2) ハモグリバエ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや多
発生ほ場率100% (平年75%)
：やや高い (+)

(イ) 気象予報

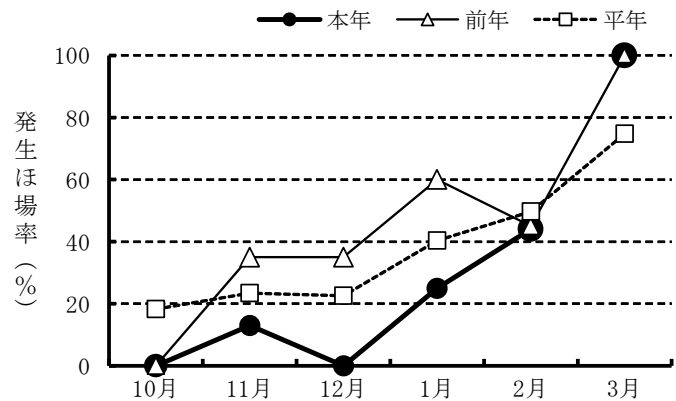
気温：高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 葉を観察し、産卵痕を認めた際は早期防除に努める。

(イ) 既に発生しているほ場では、ほ場内密度を上げないよう防除に努める。薬液は葉裏にも十分かかるよう留意し、多発ほ場では5～7日おきに連続して散布する。

(ウ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤 (RACコード参照) のローテーション散布を行う。



ハモグリバエ類の発生ほ場率 (エンドウ類)

※令和5年10月～令和6年2月は山川, 垂水, 阿久根を調査。

令和6年3月は阿久根を調査 (他地点は収穫済み)。

(3) アザミウマ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少
発生ほ場率50% (平年70%)
：やや低い (-)

(イ) 気象予報

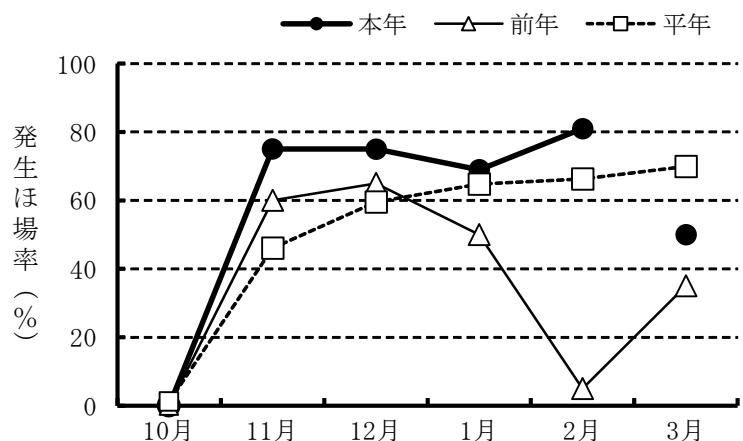
気温：高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) アザミウマ類は花の子房部分に産卵し、「白ぶくれ莢」となる。若莢の被害や青色粘着トラップへの誘殺から発生状況を把握し、初期防除に努める。

(イ) 薬剤のかかりにくい花卉の奥や若莢に寄生するので、丁寧な薬剤散布に努める。

(ウ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤 (RACコード参照) のローテーション散布を行う。



アザミウマ類 (被害莢) の発生ほ場率 (エンドウ類)

※令和5年10月～令和6年2月は山川, 垂水, 阿久根を調査。

令和6年3月は阿久根を調査 (他地点は収穫済み)。

7. バレイシヨ

(1) 疫病 (令和5年度技術情報第17号:令和5年12月26日付け参照)



ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県内全域
- (イ) 対象作型 春作
- (ウ) 発生量 県本土:並
熊毛地域:やや多

イ 予報の根拠

<県本土>

- (ア) 調査結果 発生量:やや少
発生ほ場率0% (平年11%)
:やや低い (-)

(イ) 気象予報

- 気温:高い (+)
- 降水量:多い (+)

<熊毛地域>

- (ア) 調査結果 発生量:並
発生ほ場率50% (平年43%):並

(イ) 気象予報

- 気温:高い (+)
- 降水量:多い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

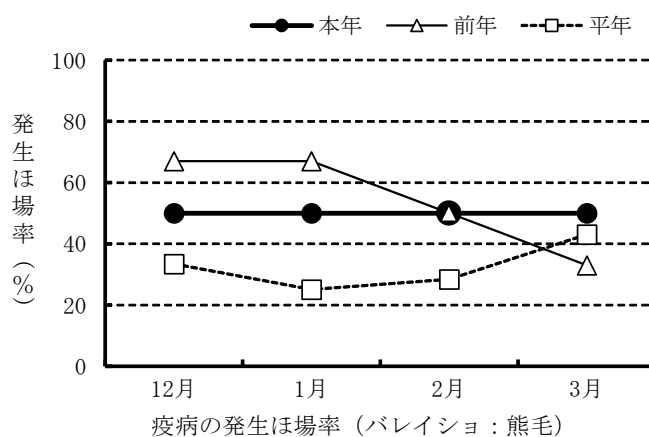
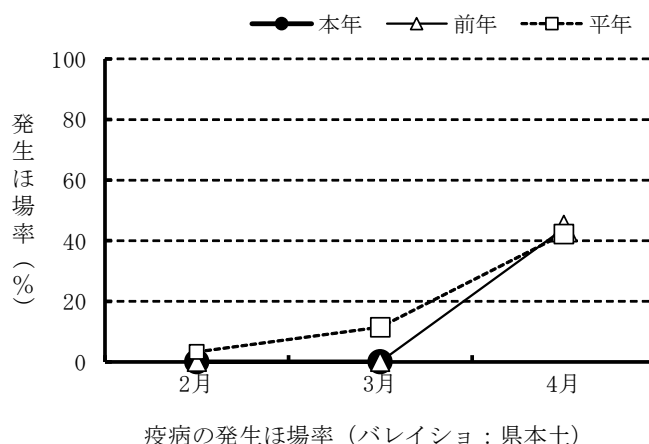
- (ア) 降雨が数日続くなど、土壌水分が高い場合に感染しやすく、発病後は急速に病勢が進展するので、防除は予防散布に重点をおき、適期を逃さないように注意する。

(イ) ほ場の見回りを行い、発生が認められたら直ちに治療効果のある薬剤の散布を行う。その後は、進展状況に応じて7～10日後に追加散布を行う。

(ウ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤 (RACコード参照) のローテーション散布を行う。

(エ) 収穫が遅れると被害拡大につながるため、適期収穫を行う。

(オ) 発病株は次年度の伝染源となるため、ほ場外に持ち出し適正に処分する。ほ場外へ残渣の持ち出しが困難なほ場では、天地返しにより残渣を土中深く埋没させ、次作にサトウキビ、イネ科牧草等の輪作を行う。



.....

防除に関する今月の留意事項

1. 野菜類全般の耕種的防除について

2月以降は平年より気温が高く、降水量は多く推移しており、向こう1ヶ月の予報も同様に推移する見込みである。このため、作物が軟弱徒長気味に生育し葉が混み合う状態となったり、成り疲れ等になっている場合は、病害虫の発生を助長する恐れがある。そこで、適正な肥培管理に努め、葉かきなどにより風通しを改善するなど、病害虫の発生しにくい環境を整える。

2. 野菜類全般の残渣処理について

収穫後の残渣は、菌核病や軟腐病をはじめ次作に対して様々な病害虫の伝染源（発生源）となるので、速やかにほ場外へ持ち出し、適切に処分する。ほ場外への持ち出しが困難なほ場では、複数回の耕耘により残渣の分解を促す。

Ⅲ. 花き

1. キク

(1) ハダニ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率20%（平年28%）：並

(イ) 気象予報

気温：高い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

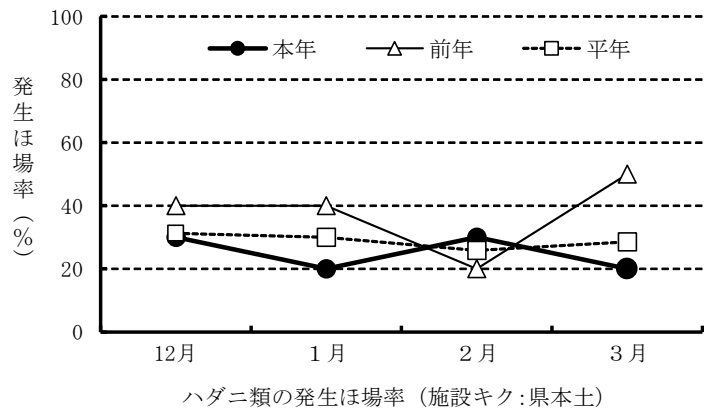
(ア) 出入口や前作での発生場所近く等でスポット状に発生する機会が多いので、ほ場全体をよく見回り、早期発見と早期防除に努める。

(イ) 薬剤は葉裏までよくかかるように散布する。

(ウ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤（RACコード参照）のローテーション散布を行う。

(エ) ほ場内及びその周辺の除草に努める。

(オ) 収穫後の残さは早めに除去し、適正に処分する。



(2) アザミウマ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率30%（平年25%）：並

(イ) 気象予報

気温：高い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) アザミウマ類の発生動向を把握するためには、出入口や開口部付近での青色粘着シートの設置が有効である。なお、クロゲハナアザミウマの誘引効率はやや低いと思われる。

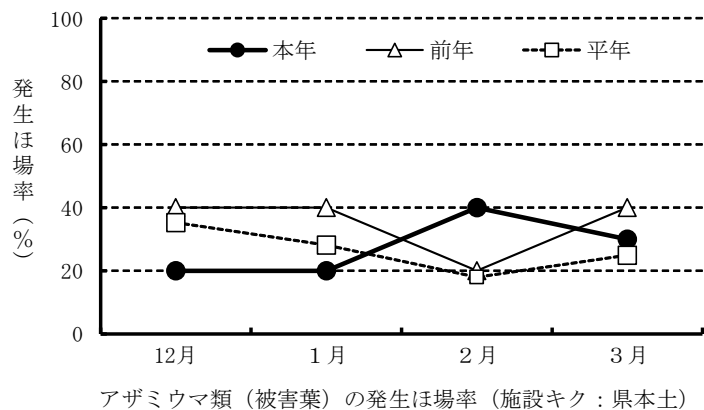
(イ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤（RACコード参照）のローテーション散布を行う。

(ウ) クロゲハナアザミウマは主に中下位葉に寄生しているため、薬剤は下葉の葉裏までかかるよう丁寧に散布する。

(エ) アザミウマ類はキクえそ病（TSWV）、キク茎えそ病（CSNV）を媒介するので、ほ場への侵入防止と早期発見および早期防除に努める。

(オ) ほ場内及びその周辺の除草に努める。

(カ) 収穫後の残さは早めに除去し、適正に処分する。



IV. 果 樹

1. カンキツ

(1) そうか病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 並

奄美地域 並

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果(旧葉) 発生量：やや少

発生ほ場率 0% (平年 4%)

：やや低い(－)

発病葉率 0% (平年0.1%)

：やや低い(－)

(イ) 気象予報

気温：高い(+)

降水量：多い(+)

<奄美地域>

(ア) 調査結果(旧葉) 発生量：並

発生ほ場率 0% (平年0%)：並

発病葉率 0% (平年0%)：並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 落花期の防除適期を逸さないように努める。

(イ) 開花期以降のデランフロアブルとマシン油乳剤の近接散布は、薬害を生じる恐れがあるので散布間隔は30日以上あける。

(ウ) 枝の混み合う部分は整理し、樹冠内の風通しをよくする。

(2) かいよう病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 やや多

奄美地域 やや多

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果(旧葉) 発生量：並

発生ほ場率 23% (平年 26%)

：並

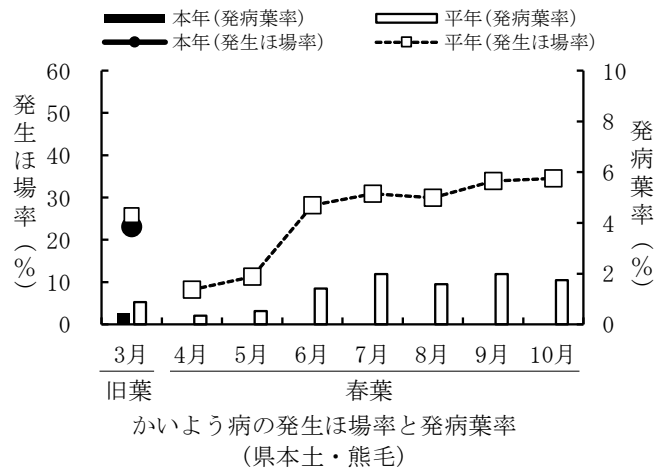
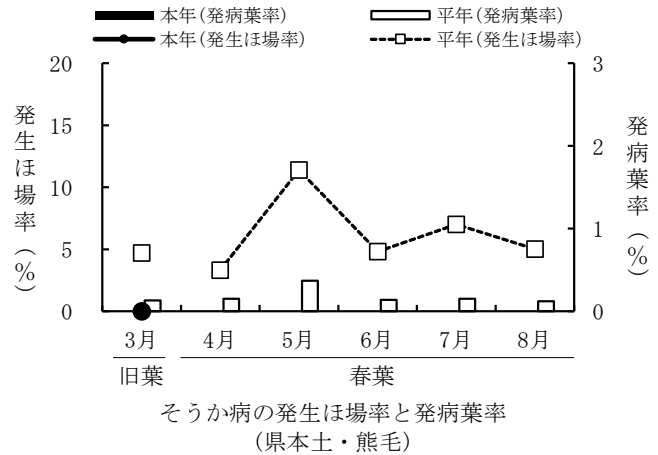
発病葉率0.5% (平年0.9%)

：やや低い(－)

(イ) 気象予報

気温：高い(+)

降水量：多い(+)



<奄美地域>

- (ア) 調査結果 (旧葉) 発生量：やや多
発生ほ場率 14% (平年 7%)：やや高い (+)
発病葉率 0.14% (平年 0.06%)：やや高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 旧葉に発生が認められる園地や、感染しやすい樹種で発芽前に防除していない園地では、速やかに防除する。
(イ) 銅水和剤の使用にあたっては、薬害を軽減するために炭酸カルシウム剤を必ず加用する。

(3) ミカンハダニ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 やや多
奄美地域 やや少

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

- (ア) 調査結果 (旧葉) 発生量：並
発生ほ場率 13% (平年 12%)：並
寄生葉率 2.4% (平年 1.4%)：並

(イ) 気象予報

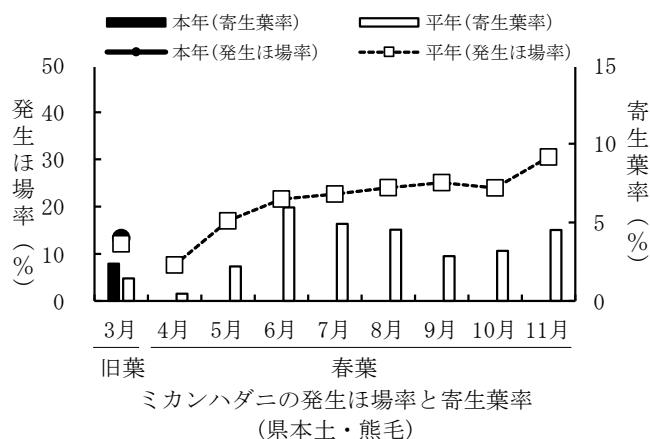
気温：高い (+)

<奄美地域>

- (ア) 調査結果 (旧葉) 発生量：やや少
発生ほ場率 0% (平年 9%)：やや低い (-)
寄生葉率 0% (平年 0.8%)：やや低い (-)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 1葉あたり雌成虫数0.5~1.0頭 (寄生葉率で30~40%) を目安に防除する。
(イ) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、春期~夏期にかけては、マシン油乳剤 (97%) を主体とした防除を行う。



V. 茶 樹

(1) チャノコカクモンハマキ,

チャハマキ (令和5年度技術情報第21号:令和6年3月25日付け参照)



ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県内全域
- (イ) 発生時期
チャノコカクモンハマキ 早い
チャハマキ 早い
- (ウ) 発生量
チャノコカクモンハマキ 並
チャハマキ 多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果

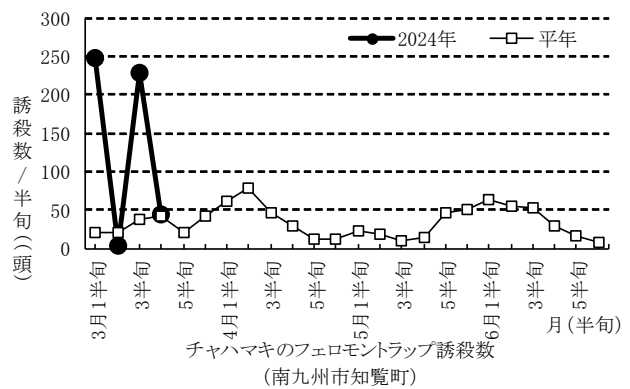
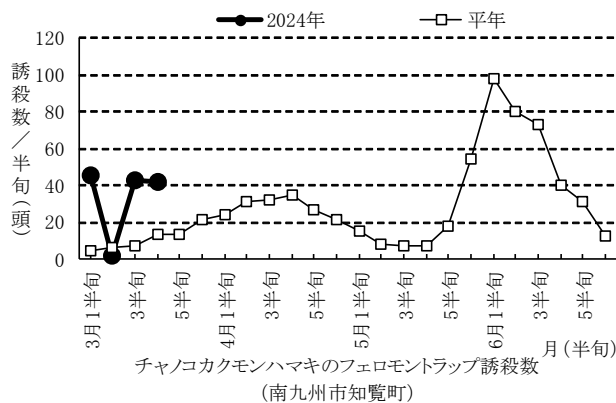
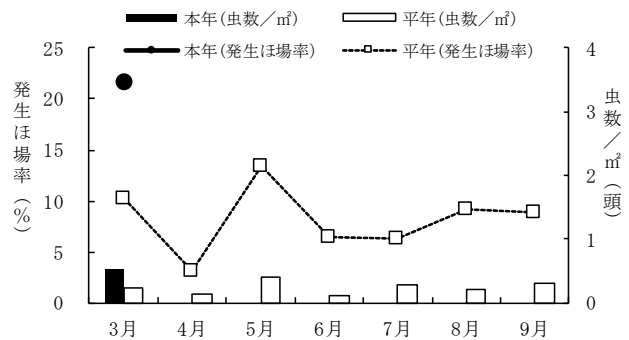
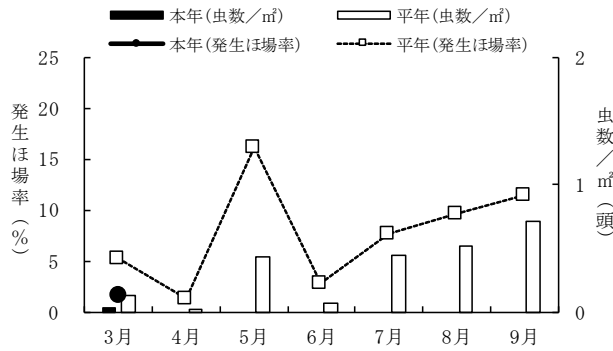
	チャノコカクモンハマキ	チャハマキ
【巡回調査】		
発生量	やや少	多
発生ほ場率	2% (平年 5%) : やや低い (-)	22% (平年 10%) : 高い (+)
虫数 (1㎡当たり)	0.03頭 (平年0.1頭) : 並	0.5頭 (平年0.2頭) : 多 (+)
【フェロモントラップ】		
初誘殺日	3/1 (平年3/3)	3/1 (平年3/7)
誘殺数 (3月1半旬~4半旬)	132頭 (平年31.1頭) (+)	526頭 (平年122.3頭) (+)

(イ) 気象予報

気温: 高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 性フェロモン剤を用いて防除する場合は、チャハマキの発生量が多いため一番茶の摘採前までに行う。また、性フェロモン剤の効果を高めるには、できるだけ広域での一斉使用が望ましい。



(2) カンザワハダニ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率 40% (平年 46%) : やや少

寄生葉率 1.9% (平年2.5%) : 並

(イ) 気象予報

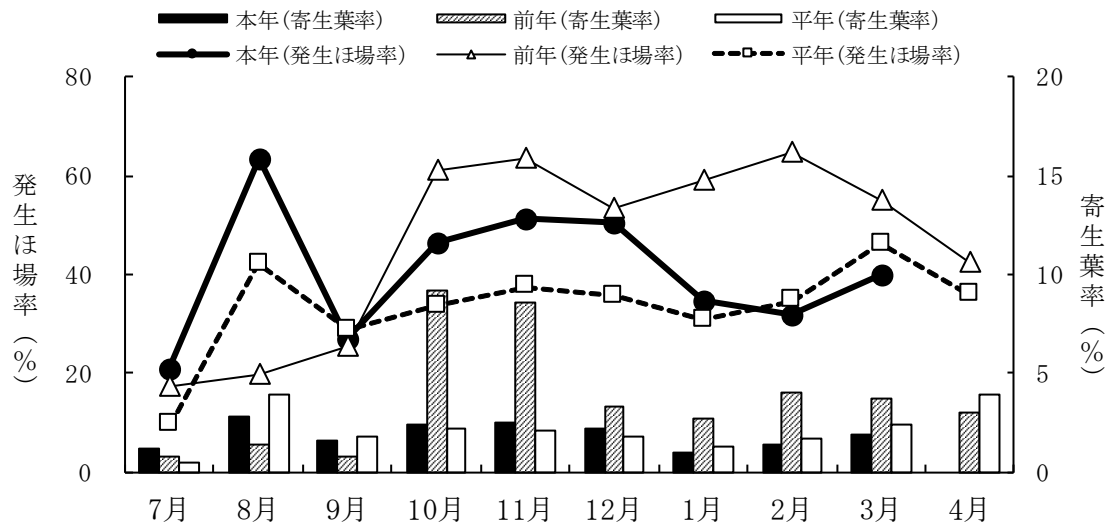
気温：高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 摘採後発生が多い場合は、整枝または刈番茶摘採後、早めに防除を行う。

(イ) 本種の全生育ステージに効果の高い薬剤を用いて、裾部・葉裏に十分にかかるよう散布する。

(ウ) 天敵に影響の少ない薬剤を使用する。



カンザワハダニの発生ほ場率と寄生葉率

農薬の適正使用について

農薬は以下の点に注意して適正に使用しましょう。

1. 使用前にラベルや説明書をよく読む。
決められた対象作物・使用時期・回数・使用濃度等を守り、記載された用途、方法以外では使用しない。
2. 使用する農薬にあわせて、適切な防除衣、保護具（マスク・手袋など）を着用する。
3. 散布前には防除器具の整備・点検をする。
4. 体調がすぐれないときは散布作業を避ける。
5. 散布時には薬剤がほ場の外に飛散したり、流出したりしないよう十分注意する。
6. クロルピクリン剤は、住宅地および畜舎に隣接するほ場や、土壌が乾燥しているときは使用しない。注入後は直ちに穴をふさぎポリエチレンフィルム等で10日以上被覆する。
7. 毒性が強い農薬は、施設内や噴霧のこもりやすい場所では使用しない。
8. 使用期限の切れた農薬、不要になった農薬および使用済みの空容器は適正に処分する。
9. 農薬は食品と区別し、鍵をかけて保管する。
10. 農薬の散布記録をつけておく。

「予報の根拠」の記載方法

- 調査結果の発生量は、前月の巡回及び定点調査による。
- 野菜類共通病害虫の発生量は、各作物での発生量やトラップ調査結果等に基づいた総合評価。
- 調査結果や気象予報等の末尾の（+）、（-）は、発生量の増加、減少要因を示す。
- 気象予報は、向こう1か月の長期予報。
- 平年値は原則として過去10年間の平年を用いている。